

天守物語

泉鏡花作

時。不詳。たゞし封建時代。――晩秋。日

没前より深更にいたる。

所。播州姫路。白鷺城の天守、第五重。

登場人物。

天守夫人、富姫。(打見は二十七八。) 岩代
國猪苗代、龜の城、龜姫(二十ばかり。)

姫川圖書之助。(わかき鷹匠。)

小田原修理。山隅九平。(ともに姫路城主武

田播磨守家臣。()

十文字ヶ原、朱盤坊。茅野ヶ原の舌長姥。

(ともに龜姫の眷屬。)

近江之丞桃六。(工人。)

桔梗。萩。葛。女郎花。撫子。(いずれも富)

姫の侍女。)

薄。(おなじく奥女中。)

女の童、禿。五人。武士。討手大勢。

舞臺。天守の五重。左右に柱、向つて三方を廻廊下の
のごとく餘して、一面に高く高麗べりの畳を敷く。

紅の鼓の緒、處に蝶結びして一條、これを欄干のご
とく取りまはして柱に渡す。おなじ鼓の緒のひかへ
づなにて、向つて右、廻廊の奥に階子を設く。階子

は天井に高く通ず。左の方廻廊の奥に、また階子の上下の口あり。奥の正面、及び右なる廻廊の半ばより厚き壁にて、廣き矢狭間、狭間を設く。外面は山嶽の遠見、秋の雲。壁に出入りの扉あり。鼓の緒の欄干外、左の一方、棟薨、並びに樹立の梢を見す。正面おなじく森々たる樹木の梢。

女童三人

――

合唱

――

此處は何處の細道ぢや、細道ぢや、

天神様の細道ぢや、細道ぢや。

―― うたひつゝ幕開く――

侍女五人。桔梗、女郎花、萩、葛、撫子。各名にそぐへる姿、鼓の緒の欄干に、あるいは立ち、あるいは坐て、手にノ、五色の絹絲を巻きたる絲棹に、金色銀色の細き棹を通し、絲を松杉の高き梢を潛らして、釣の姿す。

女童三人は、緋のきつけ、唄ひつゞく。―― 冴えてかつ寂しき聲。

少し通して下さんせ、下さんせ。

ごようのないもな通しません、通しません。

天神様へ願掛けに、願掛けに。

通らんせ、通らんせ。

唄ひつゝその遊戯をす。

薄、天守の壁の裡より出づ。壁の一劃はあたかも扉のごとく、自由に開く、この婦やゝ年かさ。鼈甲の突通し、御殿奥女中のこしらへ。

【薄】 鬼灯さん、蜻蛉さん。

【女童一】 あゝい。

【薄】 静になさいよ、お掃除が済んだばかりだから。

【女童二】 あの、釣を見ませうね。

【女童三】 然うね。

いたいけに頷きあひつゝ、侍女等の中に、はら／

と袖そでを交まじゆ。

【薄】（四邊あたりをみまはす。）これは、まあ、まことに、いゝ見み霽はらしでございますね。

【葛】あの猪苗代ひなはしろのお姫様ひめさまがお遊あそびにおいでございますから。

【桔梗】お鬱陶うつとしからうと思おもひまして。それには、申分まをしぶんのございませんお日和ひよりでございますし、遠山とほやまはもう、もみぢいたしましたから。

【女郎花】矢狹間やせまも、物見ものみも、お目觸めねはりな、泥どろや、鐵てつの、重おもくるしい、外圍そとがこいは、一寸取拂ちよつととりはらつておきました。

【薄】成程なるほど、成程なるほど、よくおなまけ遊あそばす方かたたちにしては、感心かんしんにお氣きのつきましたことこでございます。

【桔梗】あれ、人ひとぎきの悪わるいことを。――いつ私わたしたちがなまけましたえ。

【薄】 まあ、そうお言ひの口の下で、何をしておいでだらう。二階から目薬とやらではあるまいし、お天守の五重から釣をするものがありますかえ。天の川は芝を流れはいたしません。富姫様が、よそへお出掛け遊ばして、いくら間があると申したつて、串戯ではありません。

【撫子】 否、魚を釣るのではありません。

【桔梗】 旦那様の御前に、丁ど活けるのがございませんから、皆で取つて差上げようと存じまして、花を……あの、秋草を釣りますのでございますよ。

【薄】 花を、秋草をえ。はて、これは珍しいことを承ります。そして何かい、釣れますかえ。

女童の一人の肩に、袖でつかまつて差覗く。

【桔梗】 え、釣れますとも、尤も、新發明でございませぬ。

【薄】 高慢なことをお言ひでない。——が、つきましては、念のために伺ひますが、お用ゐに成ります。……餌の儀でござんすがね。

【撫子】 はい、それは白露でございますわ。

【葛】 千草八千草秋草が、それは／＼、今頃は、露を澤山欲しがるのでございますよ。刻限も七つ時、まだ夕露も夜露もないのでございますもの。(隣を視る。) ご覧なさいまし、女郎花さんは、もう、あんなにお釣りなさいました。

【薄】 あゝ、眞個にねえ。まったく草花が釣れると成れば、さて、これは静にして、拜見をいたしませう。釣をするのに饒舌つては悪いと云ふから。……一番だまつておとなしい女郎花さんがよく釣つた、争はれないものぢやないかね。

【女郎花】 否、お魚とは違ひますから、聲を出しても、唄ひましても構ひません。——唯、風が騒ぐと不可ませんわ。……餌の露が、ばら／＼

こぼれて了しまひますから。あゝ、釣つれました。

【薄】 お見事みごと。

と云いふ時とき、女を郎みなへし花はな、棹さながらくる／＼と棹わくを卷ま戻もどす、絲いとにつれて秋あき草くさ、欄らん干くわんに上のほり来る。さきに傍かたはらに置おきたる花はなとゝもに、女め童のわらわの手てに渡わたす。

【桔梗】 釣つれました。（おなじく絲いとを卷ま戻もどす。）

【萩】 あれ、私わたしも……

花はなにつれて、黄きと、白しろ、紫むらさの胡こ蝶てふの群むれ、ひら／＼と舞ま上ある。

【葛】 それ／＼私わたしも ー ー まあ、しをらしい。

【薄】 桔き梗やうさん、棹さをお貸かしな、私わたしも釣つらう、まことに感かん心しん、おつだことねえ。

【女郎花】 お待まち遊あそばせ、大たい層そう風かぜがで出でて参まりまし
た、餌えさが絲いとにとまりますまい。

【薄】 意地の悪い、急に激しい風になつたよ。

【萩】 あゝ、内廓の秋草が、美しい波を打ちます。

【桔梗】 然う云ふうちに、色もかくれて、薄ばかりが眞白に、水のやうに流れて來ました。

【葛】 空は黒雲が走りますよ。

【薄】 先刻から、野も山も、不思議に暗いと思つて居た、これは酷い降りに成りますね。

舞臺暗く成る、電光閃く。

【撫子】 夫人は、何處へおいで遊ばしたのでございます。早くお歸り遊ばせば可うございますね。

【薄】 平時のやうに、何處へとも何ともおつしやらないで、ふいにお出ましに成つたもの。

【萩】 お迎ひにも參られませんか。

【薄】 お客様、龜姫様のおいでの時刻を、それでも御含みでいらつしやるから、ほどなくお歸りでごんせう。――皆さんが、お心入れの御馳走、何、秋草を、早くお供へなさが可いね。

【女郎花】 それこそ露の散らぬ間に。――

正面奥の中央、丸柱の傍に鎧櫃を据ゑて、上に、金色の眼、白銀の牙、色は藍の如き獅子頭、萌黄錦の母衣、朱の渦まきたる尾を装ひたるまゝ、莊重にこれを据ゑたり。――侍女等、女童とゞもに其の前行き、跪きて、手に／＼秋草を花籠に挿す。色其の美しき蝶の群、齊く飛連れてあたりに舞ふ。雷やゝ聞ゆ。雨來る。

【薄】 (薄暗き中に。) 御覽、兩眼赫耀と、牙も動くやうに見えること。

【桔梗】 花も胡蝶もお氣に入つて、お嬉しいんでございませう。

時に閃電す。光の裡を、衝と流れて、胡蝶の彼處に流るゝ處、殆ど天井を貫きたる高き天守の棟に通ずる階子。――侍女等、飛ぶ蝶の行方につれて、ともに其方に目を注ぐ。

【女郎花】 あれ、夫人がお歸りでございますよ。

はら／＼とその壇の許に、振袖、詰袖、揃つて手をつく。階子の上より、先づ水色の衣の褙、裳を引く。すぐに蓑を被ぎたる姿見ゆ。長なす黒髪、片手に竹笠、半ば面を蔽ひたる、美しく氣高き貴女、天守夫人、富姫。

【夫人】 (其の姿に舞ひ絶る蝶々の三つ二つを、蓑を開いて片袖に受く。) 出迎へかい、御苦勞だね。(蝶に云ふ。)

―― お歸り遊ばせ、―― お歸り遊ばせ――
侍女等、口々に言迎ふ。

【夫人】 時々、ふいと氣まかせに、野分のやうな

出歩行を、・・・

八々と竹笠を落す。女郎花、これを受け取る。
貴女の面、凄きばかり白く臍長けたり。

露も散らさぬお前たち、花の姿に氣の毒だね。
(下りかゝりて壇に弱腰、廊下に裳。)

【薄】 勿體ないことを御意遊ばす。―― まあ、
御前様あんなものを召しまして。

【夫人】 似合つたかい。

【薄】 尚ほ其の上に、御前様、お痩せ遊ばしてを
がまれます。柳よりもお優しい、すら／＼と雨の刈
萱を、お被け遊ばしたやうにござります。

【夫人】 嘘ばかり。小山田の、案山子に借りて
來たのだものを。

【薄】 否、それでも貴女がめしますと、玉、白銀、

揺ゆの絲いとの、鎧よろひのやうにもをがまれます。

【夫人】 賞ほめられて些ちつと重おもく成なつた。(蓑みのを脱ぬぐ。)

ぐ。)

撫なで子しこ、立たち、うけて欄干らんかんにひらりと掛かく。

蝶ていの數かず、その蓑みのに翼つばさを、憩いこふ。……夫人ふじん、獅子頭しがしらに會釋えしやくしつゝ、座ざに、褥しとねに着つく。脇息けふそく。侍女じぢよたちかしづく。

少すこし草臥くたびれましたよ。……お龜様かめさまはまだお見みえではなかつたらうね。

【薄】 はい、お姫様ひめさまは、やがてお入いりでござりませう。それにつけても、お前様まへさまおかへりを、お待ち申ま上げました。——そしてまあ、孰方いづれへお越こし遊あそばしました。

【夫人】 夜叉やしやケ池いけまで參まゐつたよ。

【薄】 おほ、越前國大野郡、人跡絶えました山奥の。

【萩】 あの、夜叉ヶ池まで。

【桔梗】 お遊びに。

【夫人】 まあ、遊びと言へば遊びだけでも、大池のぬしのお雪様に、些と・・・頼みたい事があつて。

【薄】 私はじめ、こゝに居ります、誰ぞお使ひをいたしますもの、御自分おいで遊ばして、何と、雨にお逢ひなさいましてさ。

【夫人】 其の雨を頼みに行きました。ー 今日
はね、此の姫路の城・・・こゝから視れば長屋
だが、・・・長屋の主人、それ、播磨守が、秋
の野山へ鷹狩に、大勢で出掛けました。皆知つてお
いでだらう。空は高し、渡鳥、色鳥の鳴く音は嬉し
いが、田畑と言はず駈廻つて、きやつ／＼と飛騒ぐ、

知行とりども人間の大聲は騒がしい。まだ、それも鷹ばかりなら我慢もする。近頃は不作法な、弓矢、鐵砲で荒立つから、うるさくもうるさしさ。何よりお前、私のお客、この大空の霧を渡つて輿でおいでのお龜様にも、途中失禮だと思つたから、雨風と、はたゞ神で、鷹狩の行列を追崩す。――あの、それを、夜叉ヶ池のお雪様にお頼み申しに參つたのだよ。

【薄】 道理こそ時ならぬ、急な雨と存じました。

【夫人】 この邊は雨だけかい。それは、ほんの吹降りの餘波であらう。鷹狩が遠出をした、姫路野の一里塚のあたりをお見な。暗夜のやうな黒い雲、眩いばかりの電光、可恐しい雹も降りました。鷹狩の連中は、曠野の、塚の印の松の根に、溼に寄つた鮎のやうに、うよ／＼集つて、あぶ／＼して、あやゐ笠が泳ぐやら、陣羽織が流れるやら。大小をさしたものが、些とは雨にも濡れたが可い。慌てる紋は泡沫のよう。野袴の裾を端折つて、灸のあとを出すのがある。おゝ、をかしい。（微笑む。）粟粒を一つ

二つと算へて拾ふ雀でも、俄雨には容子が可い。五百、三百石、千石一人で食むものが、其の笑止さと言つてはない。をかしいやら、氣の毒やら、ねえ、お前。

【薄】 はい。

【夫人】 私はね、群鷺ヶ峰の山の端に、掛稻を楯にして、戻道で、そつと立つて視めていた。其處には晝の月があつて、雁金のやうに（其の水色の袖を壓ゆ。）其の袖に影が映つた。影が、結んだ玉づさのやうにも見えた。――夜叉ヶ池のお雪様は、激いなかにお床しい、野は其の黒雲、尾上は瑠璃、皆、あの方のお計らひ。それでも鷹狩の足も腰も留めさせずに、大風と大雨で、城まで追返しておくれの約束。鷹狩たちが遠くから、松を離れて、其の曠野を、黒雲の走る下に、泥川のやうに流れてくるに従つて、追手の風の横吹。私が見ていたあたりへも、一村雨颯とかゝつたから、歌も讀まずに蓑をかりて、案山子の笠をさして來ました。あゝ、其處の蜻蛉と鬼灯たち、小兒に持たして後ほどに返しませう。

【薄】 何の、それには及びますまいと存じます。

【夫人】 いえ／＼、農家のものは大切だから、等閑には成りません。

【薄】 其の儀は畏りました。お前様、まあ、それよりも、おめしかへを遊ばしまし、おめしものが濡れまして、お氣味が悪うござりませう。

【夫人】 おかげで濡れはしなかつた。氣味の悪い事もないけれど、隔てぬ中の女同士も、お龜様に、此のまゝでは失禮だらう。(立つ。)着換へませうか。

【女郎花】 次手に、お髪も、夫人様。

【夫人】 あゝ、あげて貰はうよ。

夫人に續いて、一同、壁の扉に隠る。女童のこりて、合唱す ー ー

此處は何處の細道ぢや、細道ぢや。

天神様の細道ぢや、細道ぢや。

時に棟に通ずる件の階子を棟よりして入來る、岩
代國耶麻郡猪苗代の城、千疊敷の主、龜姫の供頭、
朱の盤坊、大山伏の扮装、頭に犀の如き角一つあり、
眼圓かに面の色朱よりも赤く、手と脚、瓜に似て
青し。白布にて蔽うたる一個の小桶を小脇に、柱を
めぐりて、内を覗き、女童の戯るゝを視つゝ破顔し
て笑ふ。

【朱の盤】 がち／＼がち／＼。

齒を嚙鳴らす音をさす。女童等、走り近く時、面
を差寄せ、大口開く。

もをう！ (獸の吠ゆる眞似して威す。)

【女童一】 可厭な、小父さん。

【女童二】 可恐くはありませんよ。

【朱の盤】 だゞだゞ。(濁れる笑。) いや、さ

すがは姫路お天守の、富姫御前の禿たち、變化心備はつて、奥州第一の赭面に、びくともせぬわ我折れ申す。ー さて、更めて内方へ、ものも、案内を頼みませう。

【女童三】 屋根から入った小父さんはえ？

【朱の盤】 これは又御挨拶だ。唯、猪苗代から参つたと、さゝ、取次、取次。

【女童一】 知らん。

【女童三】 べいゝ。(赤べろする。)

【朱の盤】 これは、いかな事ー (立直る。大音に。) ものも案内。

【薄】 どうれ。(壁より出迎ふ。) いづれから。

【朱の盤】 これは、岩代國會津郡十文字ヶ原青五輪のあたりに罷在る、奥州變化の先達、允殿館のあ

るじ朱の盤坊でござる。即ち猪苗代の城、龜姫君の御供をいたし罷出ました。當お天守富姫様へ御取次を願ひたい。

【薄】 お供御苦勞に存じ上げます。あなた、お姫様は。

【朱の盤】 (眞仰向けに承塵を仰ぐ。) 屋の棟に、すでに輿をばお控えなさるゝ。

【薄】 夫人も、お待兼ねでございます。

手を敲く。音につれて、侍女三人出づ。齊しく手をつく。

早や、御入らせ下さりませ。

【朱の盤】 (空へ云ふ。) 輿傍へ申す。此方にもお待うけぢや。ー 姫君、此へお入りのやう、舌長姥、取次がつせえ。

階子の上より、眞先に、切禿の女童、うつくしき
手鞆を兩袖に捧げて出づ。

龜姫、振袖、襦袢、文金の高髻、扇子を手にする。
又女童、うしろに守刀を捧ぐ。あと壓へに舌長姥、
古びて黄ばめる練衣、褪せたる紅の袴にて従ひ来る。

天守夫人、侍女を従へ出で、設けの座に着く。

【薄】（そと龜姫を仰ぐ。）お姫様。

出むかへたる侍女等、皆ひれ伏す。

【龜姫】 お許し。

しとやかに通り座につく。唯、夫人と面を合す
とともに、雙方よりひたと褥の膝を寄す。

【夫人】（親しげに微笑む。）お龜様。

【龜姫】 お姉様、おなつかしい。

【夫人】 私もお可懐しい。――

―― (間。)

【女郎花】 夫人。(と長煙管にて煙草を捧ぐ。)

【夫人】 (取つて吸ふ、そのまゝ吸口を姫に渡す。) 此の頃は、めしあがるさうだね。

【龜姫】 えゝ、どちらも。(うけて、其の煙草を吸ひつゝ、左の手にて杯の眞似をす。)

【夫人】 困りましたねえ。(また打笑む。)

【龜姫】 ほゝゝ、貴女を旦那様にはいたすまいし。

【夫人】 憎らしい口だ。よく、それで、猪苗代から、この姫路まで――道中五百里はあらうねえ、……お年寄。

【舌長姥】 御意にござります。……海も山もさしわたしに、風でお運び遊ばすゆゑに、半日路

には足りませぬが、宿々を歩ひましたら、五百里……されば五百三十里、もそつともござりませうぞ。

【夫人】 あゝね。(龜姫に。)よく、それで、手鞠をつきに、わざ／＼此處までおいでだね。

【龜姫】 でございますから、お姉様は、私がお可愛うございませう。

【夫人】 否、お憎らしい。

【龜姫】 御勝手。(扇子を落す。)

【夫人】 矢張りお可愛い。(その背を抱き、見返して、姫に附添える女童に。)どれ、お見せ。(手鞠を取る。)まあ、綺麗な、私にも持つて来て下されば可いものを。

【朱の盤】 はゝッ。(その白布の包を出し。)姫君より、貴女様へ、お心入れの土産が此に。申すは、

差出がましようござるなれど、これは格別、奥方様の
思召しにかなひませう。……何と、姫君。
(色を伺ふ。)

【龜姫】 あゝ、お開き。お姉様の許だから、遠慮
はない。

【夫人】 それはノ、お嬉しい。が、お龜様は人
が悪い、中は磐梯山の峰の煙か、虚空藏の人魂では
ないかい。

【龜姫】 似たもの。ほゝゝほゝ。

【夫人】 要りません、そんなもの。

【龜姫】 上げません。

【朱の盤】 いや先づ、(手を擧げて制す。)おな
かゞよくてお争ひ、お言葉の花が蝶のやうに飛びま
して、お美しい事でござる。……さて、此方
より申す儀ではなけれども、奥方様様、此の品ばかり

りはお可厭ではござるまい。

包を開く、首桶。中より、色白き男の生首を出し、もとゞりを掴んで、づうんと据う。

や、不重寶、途中搖溢いて、此は汁が出ました。

(その首、血だらけ。)これ、姥殿、姥殿。

【舌長姥】 あい／＼、あい／＼。

【朱の盤】 ご進物が汚れたわ。鱗の落ちた鱸の鱈を眞水で洗ふ、手の悪い魚賣人には似たれども、其の儀では決してない。姥殿、此方、一拭ひ、清めた上で進ぜまいかの。

【夫人】 (煙管を手につき、面正しく屹と視て。) 氣遣ひには及びません、血だらけなは、尚ほおいしからう。

【舌長姥】 こぼれた羹は、埃溜の汁でござるわの、お鹽梅には寄りませぬ。汚穢や、見た目に、汚穢や。

どれ／＼掃除して参らせうぞ。(紅の袴にて膝行り
出で、桶を皺手に犇と壓へ、白髪を、ざつと捌き、
染めたる齒を角に開け、三尺ばかりの長き舌にて生
首の顔の血をなめる。)汚穢や、(ペろ／＼。)汚
穢やの。(ペろ／＼。)汚穢やの、汚穢やの、あゝ、
甘味やの、汚穢やの、あゝ、汚穢いぞの、やれ、甘
味いぞなう。

【朱の盤】(慌しく遮る。)やあ、姥さん、齒を
當てまい、ご馳走が減りはせぬか。

【舌長姥】何のいの。(ぐつたりと衣紋を抜く。)と
取る年の可恐しさ、近頃は齒が悪うて、人間の首や、
澤庵の尻尾はの、かくやにせねば咽喉へは通らぬ。
そのまゝの形では、金花花糖の鯛でさへ、横嚙りに
はならぬ事よ。

【朱の盤】後生らしい事を言ふまい、彼岸は過ぎ
たぞ。ー いや、奥方様、この姥が件の舌にて舐
めますると、鳥獸も人間も、とろ／＼と消えて骨ば
かりになりますわ。．．．そりやこそ、申さぬ

ことではなかつた。お土産の顔つきが、時の間に、細長う成りました。なれども、過失の功名、死んで變りました人相が、却つて、もとの面體に戻りました。……姫君もご覧ぜい。

【龜姫】（扇子を顔に、透かし見る。）あゝ、ほんになあ。

侍女等一同、瞬きもせず熟と視る。誰も一口食べたさう。

【薄】御前様——あの、皆さんもご覧なさいまし、龜姫様お持たせの此の首は、もし、此の姫路の城の殿様の顔に、よく似ているではござんせぬか。

【桔梗】眞に、瓜二つでございますねえ。

【夫人】（打頷く。）お龜様、此のお土産は、これは、たしか……

【龜姫】はい、私が廂を貸す、猪苗代龜ヶ城の主、

武田衛門之介の首でございますよ。

【夫人】 まあ、あなた。（間。）私のために、そんな事を。

【龜姫】 構ひません、それに、私がいたしたとは、誰も知りはしませんもの。私が城を出ます時はね、まだこの衛門之介はお妾の膝に凭掛つて、酒を飲んで居りました。お大名の癖に意地が汚くつてね、鯉汁を一口に食べますとね、魚の腸に針があつて、それが、咽喉へさつて、それで亡くなるのでございますから、今頃丁どそのお膳が出たぐらゐでございますよ。（ふと驚く。扇子を落す。） まあ、うつかりして、此の咽喉に針がある。（もとゞりを取つて上ぐ。） 大變なことをした、お姉様に刺さつたら何うしよう。

【夫人】 しばらく！ せつかく、あなたのお土産を、いま、それをお抜きだと、衛門之介も針が抜けて、蘇返つて了ひませう。

【朱の盤】 いかさまな。

【夫人】 私が氣をつけます、可うござんす。(扇
子を添へて首を受取る。) お前たち、瓜を二つは
知れたこと、この人はね、この姫路の城の主、播磨
守とは、血を分けた兄弟だよ。

侍女等目と目を見合わす。

一寸、獅子にお供へ申さう。

みずから、獅子頭の前に供ふ。獅子、その牙を開
き、首を呑む。首、その口に隠る。

【龜姫】 (熟と視る。) お姉様、お羨しい。

【夫人】 え。

【龜姫】 旦那様が、おいで遊ばす。

間。―― 夫人、姫と顔を合す、互に莞爾とす。

【夫人】 嘘が眞に。 . . . お互に . . .

【龜姫】 何の不足はないけれど。

【夫人】 こんな男が欲しいねえ。―― あゝ、男と云へば、お龜様、あなたに見せるものがある。―― 桔梗さん。

【桔梗】 はい。

【夫人】 あれを、一寸。

【桔梗】 畏まりました。 (立つ。)

【朱の盤】 (不意に。) や、姥殿、獅子のお頭に
見惚れまい。 尾籠千萬。

【舌長姥】 (時に、うしろ向きに乗出して、獅子
頭を視めつゝあり。) 老人ぢや、當館奥方様も御許
され。見惚れるに無理はないわいの。

【朱の盤】 いやさ、見惚れるに仔細はないが、姥殿、姥殿は其處に居て舌が届く。(苦笑す。)

舌長姥思はず正面にその口を蔽う。侍女等忍びやかに皆笑ふ。桔梗、鍬形打つたる五枚鍬、金の竜頭の兜を捧げて出づ。夫人と龜姫の前に置く。

【夫人】 あなた、此の兜はね、此の城の、播磨守が、先祖代々の家の寶で、十七の奥藏に、五枚鍬に九ツの錠を下して、大切に秘藏をして居りますのをね、今日お見えの嬉しさに、實は、貴女に上げませうと思つて取出しておきました。けれども、御心入のあなたのお土産で、私のはお恥しくなりました。それだから、唯思つたゞけの、申譯に、お目に掛けますばかり。

【龜姫】 否、結構、まあ、お目覺しい。

【夫人】 差上げません。第一、あとで氣がつきますとね、久しく藏込んであつて、かび臭い。蘭麝の薫も何にもしません。大阪城の落ちた時の、木村長

門守とのかみの思切おもひきつたやうなのだ可いけれど、．．．．
勝戦かちいくさのうしろの方はうで、矢玉やたまの雨宿あまやどりをして居ゐた、ぬく
いのらしい。ご覧らんなさい。

【龜姫】 (針金はりかねの輝かざやく裏うらを返かへす。) ほんに、討死うちじに
をした兜かぶとではありませんね。

【夫人】 だから、およしなさいまし、葛くずや、しば
らくそこへ。

指圖さしづのまゝ、葛くず、その兜かぶとを獅子頭しがしらの傍かたへに置おく。

お歸りかへまでに、屹きつとお氣きに入るいるものを調ととのえて上げ
ますよ。

【龜姫】 それよりか、お姉様あねえさま、早はやく、あのお約束やくそく
の手鞠てまりを突ついて遊あそびませうよ。

【夫人】 あゝ、遊あそびませう。―― ちらへ。――
城しろの主人あるじの鷹狩たかどりが、雨風あめかぜに追おはれ／＼て、もうや
がて大手おほてさきに歸かへる時分じぶん、あなたは澤山たんとお聲こゑがいゝ

から、この天守から美しい聲が響くと、また立騒いでお願い。

龜姫のかしづきたち、皆立ちかゝる。

いや、ご先達、お山伏は、女たちと此處で一獻お汲みがよいよ。

【朱の盤】 吉祥天女、御功德でござる。(肱を張つて叩頭す。)

【龜姫】 あゝ、姥、お前も大事ない、こゝに居てお相伴をしや。ー お姉様に、私から我儘をしますから。

【夫人】 尤さ。

【舌長姥】 もし、通草、山ぐみ、山葡萄、手造りの猿の酒、山峰の蜜、蟻の甘露、諸白もござります。が、お二人様のお手鞠は、唄を聞きますばかりでも壽命の薬と承る。恚やうに年を取りますと、慾も、

得も、はゞ、覺えませぬ。唯もう、長生がしたうござりましてなう。

【朱の盤】 や、姥殿、其の上のまた慾があるかい。

【舌長姥】 憎まれ山伏、これ歸り途に舐められさつしやるな。(とペろりと舌。)

【朱の盤】 (頭を抱ふ。) わあ、助けてくれ、角が縮まる。

侍女たち笑ふ。

【舌長姥】 さ、お供をいたしませうの。

夫人を先に、龜姫、薄と女の童等、皆行く。五人の侍女と朱の盤あり。

【桔梗】 お先達、さあ／＼、お寛ぎなさいまし。

【朱の盤】 寛がいで何とする。やあ、えいとな。

【萩】 もし、面白いお話を聞かして下さいましな。

【朱の盤】 聞かさいで何とする。(扇を笏に。)
それ、山伏と言つば山伏なり。兜巾と云つば兜巾なり。お腰元と言つば美人なり。戀路と言つば闇夜なり。野道山路厭ひなく、修行積んだる某が、此のいら高の數珠に掛け、いで一祈り祈るならば、などか利驗のなかるべき。橋の下の菖蒲は、誰が植ゑた菖蒲ぞ、ぼろぼん、ぼろぼん、ぼろぼんのぼろぼん。

侍女等わざとはら／＼と逃ぐ、朱の盤五人を追廻す。

ぼろぼんぼろぼん。ぼろぼんぼろぼん。(やがて侍女に突かれてニと倒る。) などが利驗のなかるべき。

【葛】 利驗はござんせうけれどな、そんな話は面白うござんせぬ。

【朱の盤】 (首を振つて。) ぼろぼん、ぼろぼん。

鞠唄聞ゆ。

「私わたしが姉あねさん三人さんにんござる、一人ひとり姉あねさん鼓つづみが上手じやうず、

一人ひとり姉あねさん太鼓たいこが上手じやうず。

「いつちよいのが下谷したやにござる。

下谷したや一番達いちばんだてしやでござる。二兩にりやうで帯買おびかうて、三兩さんりやうで括くけて、括くけめ括くけめに七總ななふささげて、折をりめ折をりめに、いろはと書かいて。——」

【葛】 さあ、お先達せんだつ、よしの葉はの、よい女郎衆ぢやうらうしゆではござんせぬが、参まゐつてお酌しやく。(扇あふぎを開ひらく。)

【朱の盤】 ぼろぼんぼろぼん。(同おなじく扇せんす子すにうく。(おとちやうとちやうと、丁ぢやうどあるさかな所しよ。いで、お肴さかなを所しよ望まうせう。……などか利験りげんのなかるべき。

【桔梗】 その利験りげんならござんせう。女郎花をみなへしさん、撫子なでしこさん、一寸ちよつと、お立たちなさいまし。

兩女ふたり立たつ。

こゝを何處ぞと、もし人問はゞ、こゝは駿河の
府中の宿よ、人に情を掛川の宿よ。雉子の雌鳥
ほろりと落いて、打ちきせて、しめて、しよの

いとしよの、そゞろいとしうて、遣瀬なや。

【朱の盤】 やんや／＼。

【女郎花】 今度はお先達、さあ。

【葛】 あなたがお立ちなさいまし。

【朱の盤】 ぼろぼん、ぼろぼん。こなた衆思ざし
を受けうならば。

侍女五人扇子を開く、朱の盤杯を一順す。即ち
立つ。腰なる太刀をすらりと抜き、以前の兜を切先
にかけて、衝と天井に翳し、高脛に拍子を踏んで

戈ニ劍戟を降らすこと電光のごとくなり。

盤石巖を飛ばすこと春の雨に相同じ。

然りと雖も、天帝の身には近づか
で、
修羅かれがために破らる。

—— お立ち —— (陰より諸聲。)

手早く太刀を納め、兜をもとに直す、一同つい
居る。

【龜姫】 お姉様、今度は貴方が、私へ。

【夫人】 はい。

【舌長姥】 お早々と。

【夫人】 (頷きつゝ、連れて廻廊にかゝる。目の
下遙に瞰下す。) あゝ、鷹狩が歸つて來た。

【龜姫】 (ともに、瞰下す。) 先刻私が參る時は、
蟻のやうな行列が、その鐵砲で、松並木を走つて居
ました。あゝ、首に似た殿様が、馬に乗つて反返つ

て、威張つて、本丸へ入つて來ますね。

【夫人】 播磨守さ。

【龜姫】 まあ、翼の、白い羽の雪のやうな、いゝ鷹を持つて居るよ。

【夫人】 おゝ。（軽く胸を打つ。）貴女。（間。）あの鷹を取つて上げませうね。

【龜姫】 まあ、どうしてあれを。

【夫人】 見ておいで、それは姫路の、富だもの。

蓑を取つて肩に裝ふ、美しき胡蝶の群、ひとしく蓑に舞ふ。颯と翼を開く風情す。

それ、人間の目には、羽衣を被た鶴に見える。

ひらりと落す時、一羽の白鷹颯と飛んで天守に上るを、手に捕ふ。

—— わつと云ふ聲、地より響く ——

【龜姫】 お涼しい、お姉様。

【夫人】 此の鷹ならば、鞆を投げてもとりませう。 —— 澤山遊びなさいまし。

【龜姫】 あい。（嬉しげに袖に抱く。其のまゝ、眞先に階子を上る。二三段、唯振返りて、衝と鷹を雪の手に据うるや否や。）蟲が來た。

云ふとゝもに、袖を拂つて一筋の征矢をカラリと落す。矢は鷹狩の中より射掛けたる也。

【夫人】 （齊しくともに。）む。（と肩をかはし、身を捻つて背向に成る、舞臺に面を返す時、口に一条の征矢、手にまた一条の矢を取る。下より射たるを受けたるなり。）推參な。

—— 忽ち、鐵砲の音、あまたゝび ——

【薄】 それ、皆さん。

侍女等、身を垣にす。

【朱の盤】 姥殿、確り。（姫を庇うて大手を開

く。）

【龜姫】 大事な、大事な。

【夫人】 （打笑む。）ほゝゝ、皆が花火線香をお
焚き――然うすると、鐵砲の火で、この天守が
燃えると思つて、吃驚して打たなく成るから。

――舞臺やゝ暗し。鐵砲の音止む――

夫人、龜姫と聲を合せて笑ふ、ほゝゝほ。

【夫人】 それ、御覽、ついでに其の火で、焼けさ
うな處を二三處焚くが可い、お龜様の路の松明にし
ようから。

舞臺暗し。

【龜姫】 お心づくしお嬉しや。然らば。

【夫人】 さらばや。

寂寞、やがて燈火の影に、うつくしき夫人の姿。
舞臺に唯一人のみ見ゆ。夫人うしろむきに、獅子
頭に對し、机に向ひ巻ものを讀みつゝあり。間を置
き、女郎花、清らかなる小捲巻を持ち出で、靜に夫
人の背に置き、手をつかへて、のち去る。――

此處はどここの細道ぢや、細道ぢや。

天神様の細道ぢや、細道ぢや。

舞臺一方の片隅に、下四重に通ずべき階子の口あり。その口より、先づ一の雪洞顯れ、一廻りあたりを照す。やがて衝と翳すとゝもに、美丈夫、秀でたる眉に勇壯の氣満つ。黒羽二重の紋着、萌黄の袴、臘鞞の大小にて、姫川圖書之助登場。唄をきゝつゝ低徊し、天井を仰ぎ、廻廊を窺ひ、やがて燈の影を

視て、やゝ驚く。次で几帳を認む。彼が入るべき方に几帳を立つ。圖書は躊躇の後決然として進む。瞳を定めて、夫人の姿を認む。劍夾に手を掛け、氣構へたるが、じり／＼と退る。

【夫人】（間。）誰。

【圖書】はつ。（と思はず膝を支く。）某。

【夫人】（面のみ振向く、——無言。）

【圖書】私は、當城の太守に仕ふる、武士の一人でございます。

【夫人】何しに見えた。

【圖書】百年以來、二重三重までは格別、當お天守五重までは、生あるものゝ参つた例はありません。今宵、大殿の仰せに依つて、私、見届けに参りました。

【夫人】 それだけの事か。

【圖書】 且つ又、大殿様、御祕藏の、日本一の鷹がそれまして、お天守の此のあたりへ隠れました。行方を求めよとの御意でございます。

【夫人】 翼あるものは、人間ほど不自由ではない。千里、五百里、勝手に處へ飛ぶ、とお言ひなさるがよい。――用はそれだけか。

【圖書】 別に餘の儀は承りませぬ。

【夫人】 五重に參つて、見届けた上、如何計らへとも言われなかつたか。

【圖書】 いや、承りませぬ。

【夫人】 そして、お前も、恚う見届けた上に、何うしようとも思ひませぬか。

【圖書】 お天守は、殿様のものでございます。如何

何なる事がありませうとも、私一存にて、何と計らはうとも決して存じませぬ。

【夫人】 お待ち。この天守は私のものだよ。

【圖書】 それは、貴方のものかも知れませぬ。また殿様は殿様で、御自分のものだど御意遊ばすかも知れませぬ。しかし、いずれにいたせ、私のものではないことは確でございます。自分のものでないものを、殿様の仰せも待たずに、何うしようとも思ひませぬ。

【夫人】 すゞしい言葉だね、其の心なれば、此處を無事で歸られよう。私も無事に歸してあげます。

【圖書】 冥加に存じます。

【夫人】 今度は、播磨が申しきけても、決して來てはなりません。此間は人間の來る處ではないのだから。―― また誰も參らぬやうに。

【圖書】 いや、私が参らぬ以上は、五十萬石の御家中、誰一人参りますものはございますまい。皆生命が大切にございますから。

【夫人】 お前は、そして、生命は欲うなかつたのか。

【圖書】 私は、仔細あつて、殿様の御不興を受け、お目通を遠ざけられ閉門の處、誰もお天守へ上りますものがないために、急にお呼出しでございました。その御上使は、實は私に切腹仰せつけの處を、急に御模様がへになつたのでございます。

【夫人】 では、この役目が濟めば、切腹は許されですか。

【圖書】 そのお約束でございました。

【夫人】 人の生死は構ひませんが、切腹はさしたくない。私は武士の切腹は嫌ひだから。しかし、思ひ掛なく、お前の生命を助けました。……悪

い事ではない。今夜はいゝ夜だ。それではお歸り。

【圖書】 姫君。

【夫人】 まだ、居ますか。

【圖書】 は、恐入つたる次第ではございますが、お姿を見ました事を、主人に申まして差支へはございませんか。

【夫人】 確にお言ひなさいまし。留守でなければ、何時でも居るから。

【圖書】 武士の面目に存じます。―― 御免。

雪洞を取つて静に退座す。夫人長煙管を取つて、拂く音に、圖書板敷にて一度留まり、直ちに階子の口にて、燈を下に、壇に隠る。

鐘の音。

時に一體の大入道、面も法衣も眞黒なるが、もの

陰より薨を渡り梢を傳ふが如くにして、舞臺の片隅を傳ひ行き、花道なる切穴の口に踞まる。

鐘の音。

圖書、その切穴より立顯る。

夫人すつと座を立ち、正面、鼓の緒の欄干に立ち
熟と視る時、圖書、雪洞を翳して高く天守を見返す、
トタンに大入道さし覗き状に雪洞をふつと消す。圖書
書身構す。大入道、大手を擴げてその前途を遮る。

鐘の音。

侍女等、凜々しき扮装、揚幕より、懐劍、薙刀を
構へて出づ。圖書扇子を拔持ち、大入道を拂い、懐
劍に身を躲し、薙刀と丁と合はず。かくて一同を追
込み、揚幕際に扇を揚げ、屹と天守を仰ぐ。

鐘の音。

夫人、從容として座に返る。圖書、手探りつゝも
との切穴を搜る。(間。)その切穴に没す。しばらく
くして舞臺なる以前の階子の口より出づ。猶豫はず

夫人ふじんに近づちかぎ、手てをつく。

【夫人】（先さきんじて聲こゑを掛かく。穩おだやかに。）また見みえ
たか。

【圖書】はつ、夜陰やいんと申まをし、再さい度御左おさ右いうを騒さわがせ、
まことに恐おそ入はひりました。

【夫人】何なにしに來きました。

【圖書】御天守ごてんしゆの三階中壇さんがいちゆうだんまで戻もどりますと、鳶とびば
かり大おほさの、野衾のぶすまかと存ぞんじます、大蝙蝠おほかづもりの黒くろい翼つばきに、
燈ともしびを煽あふぎ消けされまして、いかにも、進退度しんたいどを失うしなひ
ましたにより、灯ひを頂いたきに參まゐりました。

【夫人】たゞそれだけの事ことに。．．．二度と
おいでゝないと申まをした、私わたしの言葉ことばを忘わすれましたか。

【圖書】針はりばかりの片割月かたわれづきの影かげもさゝず、下したに向む
へば眞しんの暗黒やみ。男をとこが、足あしを踏ふみはづし、壇だんを轉ころがり
落おちまして、不具かたはになどなりましては、生いき効がひもない

と存じます。上を見れば五重の此處より、幽にお燈がさしました。お咎めを以つて生命をめされうとも、男といたし、階子から落ちて怪我をするよりはと存じ、御戒をも憚らず推参いたしてございます。

【夫人】（莞爾と笑む。）あゝ、爽かなお心、そして、あなたはお勇しい。燈を點けて上げませうね。（座を寄す。）

【圖書】 いや、お手づからは恐多い。私。

【夫人】 否々、この燈は、明星、北斗星、龍の燈、玉の光もおなじこと、お前の手では、蠟燭には點きません。

【圖書】 はゝツ。（瞳を凝す。）

夫人、世話めかしく、雪洞の蠟を抜き、短檠の燈を移す。燭をとつて、熟と圖書の面を視る、恍惚とす。

【夫人】（蝋燭を手にしたるまゝ。）歸したくな
く成つた、もう歸すまいと私は思ふ。

【圖書】 えゝ。

【夫人】 貴方は、播磨が貴方に、切腹を申しつ
たと言ひました。それは何の罪でございます。

【圖書】 私が拳に据ゑました、殿様が日本一とて
御秘藏の、白い鷹を、このお天守へ翳しました、そ
の越度、その罪過でございます。

【夫人】 何、鷹をそらした、その越度、その罪過、
あゝ人間と云ふものは不思議な咎を被せるものだね。
其の鷹は貴方が勝手に鳥に合せたものではありませんま
い。天守の棟に、世にも美しい鳥を視て、それが欲
しさに、播磨守が、自分で貴方にいひつけて、勝手
に自分でそらしたものを、貴方の罪にしますのかい。

【圖書】 主と家來でございます。仰せのまゝ生命
をさし出しますのが臣たる道でございます。

【夫人】 その道は曲つて居ませう。間違つたいひ
つけに従ふのは、主人に間違つた道を踏ませるので
はありませんか。

【圖書】 けれども、鷹がそれました。

【夫人】 あゝ、主従とかは可恐しい。鷹とあの人間
の生命とを取かへるのでございますか。よしそれも、
貴方が、貴方の過失なら、君と臣と云ふものゝ
それが道なら仕方がない。けれども、播磨がさしづ
なら、それは播磨の過失と云ふもの。第一、鷹を失
つたのは、貴方ではありません。あれは私が取りま
した。

【圖書】 やあ、貴方が。

【夫人】 まことに。

【圖書】 えゝ、お怨み申上ぐる。
（刀に手を掛く。）

【夫人】 鷹は第一、誰のものだと思ひます。鷹には鷹の世界がある。露霜の清い林、朝嵐夕風の爽かな空があります。決して人間の持ち物ではありません。諸侯なんど、と云ふものが、思上つた行過ぎせん。あの、鷹を、唯一人じめに自分のものと、つけ上りがして居ます。あなたは然うは思ひませんか。

【圖書】 (沈思す、問。) 美しく、氣高い、そして計り知られぬ威のある、姫君。―― 貴方にはお答が出来かねます。

【夫人】 否、否、かどだて、言籠めるのではありません。私の申すことが、少しなりともお分りになりましたら、あの其の筋道の分らない二三の丸、本丸、太閤丸、廓内、御家中の世間へなど、もうお歸りなさいます。白銀、黄金、球、珊瑚、千石萬石の知行より、私が身を捧げます。腹を切らせる殿様のかはりに、私の心を差上げます。私の生命を上げませう。あなたお歸りなさいますな。

【圖書】 迷ひました、姫君。殿に金鐵の我が心も、

波打つばかり惱亂をいたします。が、決心が出来ません。私は親にも聞きたし、師にも教へられたし、書もつにも聞かねば成りません。お暇を申し上げます。

【夫人】（歎息す。）あゝ、まだ貴方は、世の中に未練がある。それではお歸りなさいまし。（此の時蠟燭を雪洞に。）はい。

【圖書】 途方に暮れつゝ参ります。迷の多い人間を、あはれとばかり思召せ。

【夫人】 あゝ、優しいそのお言葉で、尚ほ歸したくなく成つた。（袂を取る。）

【圖書】 （きつとして袖を拂ふ。）強ひて、断つて、お歸しなくば、お抵抗をいたします。

【夫人】 （微笑み。）あの私に。

【圖書】 とんでもない事。

【夫人】 まあ、お勇ましい、凜々しい。あの、獅子に似た若いお方、お名が聞きたい。

【圖書】 夢のやうな仰せなれば、名のありなしも覺えませぬが、姫川圖書之助と申します。

【夫人】 可懐しい、嬉しいお名、忘れません。

【圖書】 以後、お天守下の往かひには、誓つて禮拜をいたします。――御免。（衝と立つ。）

【夫人】 あゝ、圖書様、しばらく。

【圖書】 是非もない、所詮活けてはお歸しない掟なのでございますか。

【夫人】 ほゝゝ、播磨守の家中とは違ひます。こゝは私の心一つ、掟なぞは何にもない。

【圖書】 それを、お呼留め遊ばしたは。

【夫人】おはなむけがあるのでござんす。――
人間は疑深い。卑怯な、臆病な、我儘な、殿様などは尚の事。貴方が此の五重へ上つて、此の私を認めたことを誰も眞個にはせぬであらう。清い、爽かな貴方のために、記念の品をあげませう。（静に以前の兜を取る。）――これを、其の記念にお持ちなさいまし。

【圖書】存じも寄らぬ御たまもの、姫君に向ひ、御辭退は却つて失禮。餘り尊い、天晴な御兜。

【夫人】金銀は堆けれど、そんなにいゝ細工ではありません。しかし、武田には大切な道具。――貴方、見覚えがありますか。

【圖書】（疑の目を凝しつゝあり。）まさかとは存ずるなり、私とても年に一度、蟲干の外には拜しませぬが、ようも似ました、お家の重寶、青龍の御兜。

【夫人】まつたく、それに違ひありません。

【圖書】（愕然とす。急に。）此にこそ足の爪立つばかり、心急ぎがいたします、御暇を申うけます。

【夫人】今度來ると歸しません。

【圖書】誓つて、――仰せまでもありません。

【夫人】然らば。

【圖書】はつ。（兜を捧げ、やゝ急いで階子に隠る。）

【夫人】（ひとりもの思ひ、机に頬杖つき、獅子にももの言ふ。）貴方、あの方を――私に下さいまし。

【薄】（靜に出づ。）御前様。

【夫人】薄か。

【薄】立派な方でございます。

【夫人】 今まで、あの人を知らなかった、目の及ばなかつた私は恥かしいよ。

【薄】 豫てのお望みに叶うた方を、何でお歸しなさいました。

【夫人】 生命が欲しい。抵抗をすると云ふもの。

【薄】 御一所に、此處にお置き遊ばすまで、何の、生命をお取り遊ばすのではございませんのに。

【夫人】 あの人の人たちの目から見ると、此處に居るのは活きたものではないのだと思ひます。

【薄】 それでは、貴方の御容色と、其のお力で、無理にもお引留めが可うございますのに。何の、抵抗をしました處で。

【夫人】 否、容色は此方からは見せたくない。力で、人を強ひるのは、播磨守なんぞの事、眞の戀は、心と心、……（軽く。）薄や。

【薄】 は。

【夫人】 然し、然うは云ふものゝ、白鷹を据ゑた、鷹匠だと申すよ。――縁だねえ。

【薄】 屹と御縁がござりますよ。

【夫人】 私も何うやら、然う思ふよ。

【薄】 奥様、いくら貴女のお言葉でも、これは些と痛入りました。

【夫人】 私も痛入りました。

【薄】 これは又御挨拶でござります。――あれ、何やら、御天守下が騒がしい。(立つて欄干に出づ、遙に下を覗込む。) ……まあ、御覽なさいまし。

【夫人】 (座のまゝ。) 何だえ。

【薄】 武士が大勢で、箒を焚いて居ります。あゝ、
武田播磨守殿、御出張、床几に掛つてお控へだ。お
ぬるくて、のろい癖に、もの見高な、せつかちで、
お天守見届けのお使ひの歸るのを待兼ねて、推出し
たのでござります。もしえ／＼、圖書様のお姿が小
さく見えます。奥様、おたまじやくしの眞中で、ご
紋着のご紋も河骨、すつきり花が咲いたやうな、水
際立つてお美しい。．．．．奥様。

【夫人】 知らないよ。

【薄】 おゝ、兜あらためがはじまりました。おや、
吃驚した。あの、殿様の漆見たいな太い眉毛が、び
く／＼と動きますこと。先刻の龜姫様のお土産の、
兄弟の、あの首を見せたら、何うでございませう。
あゝ、御家老が居ます。あの親仁も大分百姓を痛め
て溜込みましたね。そのかわり頭が兀げた。まあ、
皆が圖書様を取巻いて、お手柄にあやかるとか知ら。
おや、追取刀だ。何、何、何、まあ、まあ、奥
様々々。

【夫人】 もう可い。

【薄】 え、もう可いではございません。圖書様を賊だ、と言ひます。御祕藏の兜を盗んだ謀逆人、謀逆人、殿様のお首に手を掛けたも同然な逆賊でございますとさ。お庇で兜が戻つたのに。――何てまあ、人間と云ふものは。――あれ、捕手が掛つた。忠義と知行で、てむかひはなさらぬか知ら。しめた、投げた、嬉しい。其處だ。御家老が肩衣を撥ましたよ。大勢が拔連れた。あれ危い。豪い。圖書様抜合せた。……一人腕が落ちた。あら、胴切。また何も働かずとも可いことを、五兩二人扶持らしいのが、あら、可哀相に、首が飛びます。

【夫人】 秀吉時分から、見馴れていながら、何だねえ、騒々しい。

【薄】 騒がずには居られません。多勢に一人、あら切抜けた、圖書様がお天守に、遁込みました。追掛けますよ。槍まで持出した。(欄干をする／＼と。) 圖書様が、二重へ駈上つておいでなさいます。

大勢が追詰めて。

【夫人】（片膝立つ。）可し、お手傳ひ申せ。

【薄】お腰元衆、お腰元衆。――（呼びつゝ忙しく階子を下り行く。）

夫人、片手を掛けつゝ几帳越に階子の方を瞰下す。

音、足蹈。―― や、や、や、―― 激しき人聲、もの

圖書、もとゞりを放ち、衣服に血を浴ぶ。刀を振つて階子の口に、一度屹と下を見込む。肩に波打ち、はつと息してニと成る。

【夫人】 圖書様。

【圖書】（心づき、蹠跟と、且つ呼吸せいて急いで寄る。）姫君、お言葉をも顧みず、三度の推參をお許し下さい。私を賊……賊……謀逆

人、逆賊と申して。

【夫人】 よく存じておりますよ。昨日今日、今までも、お互に友と呼んだ人たちが、いかに殿の仰せとて、手の裏を返すやうに、ようまあ、あなたに刃を向けます。

【圖書】 はい、微塵も知らない罪のために、人間同志に殺されましては、おなじ人間、断念められない。貴女のお手に掛ります。――御禁制を破りました、御約束を背きました、其の罪に伏します。速に生命をお取り下されたい。

【夫人】 え、武士たちの夥間ならば、貴方のお生命を取りませう。私と一所には、いつまでもお活きなさいまし。

【圖書】 (急ぎつゝ。) お情餘る、お言葉ながら、生きようとて、討手の奴儕、決して活かして置きません。早くお手に掛け下さいまし。あなたに生命を取らるれば、もうこの上のない本望、彼等に討たるゝ

のは口惜い。(夫人の膝に手を掛く。)さ、生命を、
生命を—— 恚う云ふ中にも取詰めて参ります。

【夫人】 否、此處までは來ますまい。

【圖書】 五重の、其の壇、其の階子を、鼠のごとく、上りつ下りついたしおる。……豫ての風説、鬼神より、魔よりも、此處を恐しと存じて居るゆゑ、聊か躊躇はいたしますが、既に、私の、恚く参つたを、認めて居ります。恚う云ふ中にも、唯今。

【夫人】 あゝ、それも然う、何より前に、貴方をおかくまひ申して置かう。(獅子頭を取る、母衣を開いて、圖書の上に蔽ひながら。)此の中へ……
・ ・ 此の中へ——

【圖書】 や、金城鐵壁。

【夫人】 否、柔い。

【圖書】 仰の通り、眞綿よりも。

【夫人】　そして、確かに、私におつかまりなさいまし。

【圖書】　失禮御免。

夫人の背より其の袖に縋る。縋る、と見えて、身體その母衣の裾なる方にかくる。獅子頭を捧げつゝ、夫人の面、尚ほ母衣の外に見ゆ。

討手どや／＼と入込み、唯見てわつと一度退く時、夫人も母衣に隠る。唯一頭青面の獅子猛然として舞臺にあり。

討手、小田原修理、山隅九平、其の他。拔身の槍、刀。中には仰山に小具足をつけたるもあり。大勢。

【九平】　（雪洞を寄す。）やあ、怪しく、凄く、美しい、婦の立姿と見えたは此だ。

【修理】　化するわ／＼。お城の瑞兆、天人の如き鶴をご覧あつて、殿様、鷹を合せたまへば、鷹はそれ

て破蓑を投落す、・・・・言語道斷。

【九平】 他にない、姫川圖書め、死ものぐるひに、
確に其なる獅子母衣に潜つたに相違なし。やあ、上
意だ、逆賊出合へ。山隅九平向うたり。

【修理】 待て、山隅、先方で潜つた奴だ。呼んだ
つて出やしない。取つて押へ、引摺出せ。

【九平】 それ、面々。

【修理】 氣を着けい、うかつにかゝると怪我をい
たす。元來此の青獅子が、並大抵のものではないの
だ。傳へ聞く。な、以前これは御城下はづれ、群鷺
山の地主神の宮に飾つてあつた。二代以前の當城殿
様、お鷹狩の馬上から――一人町里には思ひも
寄らぬ、都方と見えて、世にも艶麗な女の、行列を
颯と避けて、其の宮へかくれたのを――とろん
この目で御覽じたわ。此方は鷹狩、もみぢ山だが、
いづれ戦に負けた國の、上臈、貴女、貴夫人たちの
落人だらう。絶世の美女だ。しやつ搦出いて奉れ、

とある。御近習、宮の中へ闖入し、人妻なればと、いなむを捕へて、手取足取しようとしたれば、舌を嚙んで眞俯向けに倒れて死んだ。其の時に、この獅子頭を熟と視て、あはれ獅子や、名譽の作かな。わらはに斯ばかりの力あらば、虎狼の手にかゝりはせじ、と吐いた、とな。續いて三年、毎年、秋の大洪水よ。何が、死骸取片づけの山神主が見た、と申すには、獅子が頭を逆にして、其の婦の血を舐め、目から涙を流いたと云ふが觸出してな。打續く洪水は、其の婦の怨だと、國中の是沙汰だ。婦が前髪にさしたのが、死ぬ時、髪をこぼれ落ちたと云ふを拾つて来て、近習が復命をした、白木に刻んだ三輪牡丹高彫のさし櫛をな、其の時の馬上の殿様は、澄して袂へお入れなさつた。祟を恐れぬ荒氣の大名。おもしろい、水を出さば、天守の五重を浸してみよ、とそれ、生捉つて来てな、此處へ打上げた其の獅子頭だ。以來、奇異妖變さながら魔所のやうに沙汰する天守、まさかとは思つたが、目のあたり不思議を見るわ。——心してかゝれ。

【九平】 心得た、槍をつける。

討手、槍にて立ちかゝる。獅子狂ふ。討手辟易す。
修理、九平等、拔連れ／＼一同立掛る。獅子狂ふ。
又辟易す。

【修理】 木彫にも精がある、活きた獣も同じ事だ。
目を狙へ、目を狙へ。

九平、修理、力を合せて、一刀づゝ目を傷く、獅子伏す。討手其の頭をおさゆ。

【圖書】 (母衣を撥退け刀を揮つて出づ。口々に罵る討手と、一刀合すと齊しく。) あゝ、目が見えない。(押倒され、取つて伏せらる。) 無念。

【夫人】 (獅子の頭をあげつゝ、すつくと立つ。黒髪亂れて面凄し。手に以前の生首の、もとゞりを取つて提ぐ。) 誰の首だ、お前たち、目のあるものは、よつく見よ。(どつしと投ぐ。)

ー 討手わつと退き、修理、恐る／＼これを拾ふ。

【修理】 南無三寶。

【九平】 殿様の首だ。播磨守様御首だ。

【修理】 一大事とも言ひやうなし。御同役、お互に首はあるか。

【九平】 可恐しい魔ものだ。うか／＼して、こんな處に居べきでない。

討手一同、立つ足もなく、生首をかこひつゝ、亂れて退く。

【圖書】 姫君、何處においでなさいます。姫君。

夫人、悄然として、立ちたるまゝ、もの言はず。

【圖書】 (あはれに寂しく手探り。) 姫君、何處においでなさいます。私は目が見えなく成りました。姫君。

【夫人】（忍び泣きに泣く。）あなた、私も目が
見えなく成りました。

【圖書】 えゝ。

【夫人】 侍女たち、侍女たち。――せめては燈
を――

――皆、盲目になりました。誰も目が見えませ
んのでございます。――（口々に一同はつと泣く
聲、壁のあなたに聞ゆ。）

【夫人】（獅子頭とゝもにハタと崩折る。）獅子
が兩眼を傷けられました。此の精霊で活きましたも
のは、一人も見えなく成りました。圖書様、
・・何處に。

【圖書】 姫君、何處に。

さぐり寄りつゝ、やがて手を觸れ、はつと泣き、
相抱く。

【夫人】 何と申さうやうもない。貴方お覺悟をなさいまし。今持たせて遣つた首も、天守を出れば消えませう。討手は直ぐに引返して参ります。私一人は、雲に乗ります、風に飛びます、虹の橋も渡りません。圖書様には出来ません。あゝ口惜い。あれ等討手のものゝ目に、蓑笠着ても天人の二人揃つた姿を見せて、日の出、月の出、夕日影にも、をがませようとと思つたのに、私の方が盲目に成つては、たゞお生命さへ助けられない。堪忍して下さいまし。

【圖書】 くやみません！ 姫君、あなたのお手に掛けて下さい。

【夫人】 えゝ、人手には掛けますまい。其のかはり私も生きては居りません、お天守の塵、煤ともなれ、落葉に成つて朽ちませう。

【圖書】 やあ、何のために貴女が、美しい姫の、この世にながらへておはすを土産に、冥土へ行くのでございませう。

【夫人】 否、私も本望でございます、貴方のお手にかゝるのが。

【圖書】 眞實のお聲か、姫君。

【夫人】 えゝ何の。―― 然うおつしやる、お顔が見たい、唯一目。……千歳百歳に唯一度、たつた一度の戀だのに。

【圖書】 あゝ、私も、もう一目、あの、氣高い、美しいお顔が見たい。（相継る。）

【夫人】 前世も後世も要らないが、せめて恚うして居たうござんす。

【圖書】 や、天守下で叫んでいる。

【夫人】 （屹となる。）口惜しい、もう、せめて一時隙があれば、夜叉ヶ池のお雪様、遠い猪苗代の妹分に、手傳を頼まうものを。

【圖書】 覺悟をしました。姫君、私を。．．．

【夫人】 私は貴方に未練がある。否、助きたい未練がある。

【圖書】 猶豫をすると討手の奴、人間なかまに屠られます、貴女が手に掛けて下さらずば、自分、我が手で。――（一刀を取直す。）

【夫人】 切腹はいけません。あゝ、是非もない。それでは私が御介錯、舌を嚙切つてあげませう。其と一所に、膽のたばねを――この私の胸を一思いに。

【圖書】 せめて其の、ものをおつしやる、貴女の、ほのかな、口許だけでも、見えたらばな。

【夫人】 貴方の睫毛一筋なりと。（聲を立てゝとも泣く。）

（奥なる柱の中に、大音あり。――）

―― 待て、泣くな／＼。――

工人、近江之丞桃六、六十ぢばかりの柔和なる
老人。頭巾、裁着、火打袋を腰に、扇を使うて顯る。

【桃六】 美しい人たち泣くな。（つか／＼と寄つて獅子の頭を撫で。）先づ、目をあけて進ぜよう。

火打袋より一挺の鑿を抜き、雙の獅子の眼に當つ。

―― 夫人、圖書と／＼もに、あつと云ふ――

【桃六】 何うだ、の、それ、見えよう。は／＼、ちやんと開いた。嬉しそくに開いた。おほ、もう笑ふか。誰がよ／＼、あつはつはつ。

【夫人】 お爺様。

【圖書】 御老人、あなたは。

【桃六】 然れば、誰かの櫛に牡丹も刻めば、此の

獅子頭も彫つた、近江之丞桃六と云ふ、丹波の國の楊枝削よ。

【夫人】 まあ、（圖書と身を寄せたる姿を心づく。）こんな姿を、恥かしい。

圖書も、ともに母衣を被ぎて姿を蔽ふ。

【桃六】 むゝ、見える、恥しさうに見える、極りの悪さうに見える、が矢張り嬉しさうに見える、はつはつはつはつ。睡じいな、若いもの。（石を切つて、ほくちをのぞませ、煙管を横銜へに煙草を、すぱ／＼。）氣苦勞の擧句は休め、安らかに一寐入さつせえ。其のうちに、もそつと、其の上にも清い目にして進ぜよう。

鑿を試む。月影さす。

そりや光がさす、月の光あれ、眼玉。（鑿を試み、小耳を傾け、鬨のごとく叫ぶ天守下の聲を聞く。）世は戦でも、胡蝶が舞ふ、撫子も桔梗も咲くぞ。……馬鹿めが。（呵々と笑ふ。）こゝに

獅子しがゝゐる。お祭まつり禮れいだと思おもつて騒さわげ。鑿のみをあた當あて
つゝ。槍やり、刀かたな、弓ゆみ矢や、鐵てつ砲ぱう、城しろの奴やつら等ら。

—
—
一幕
—
—